

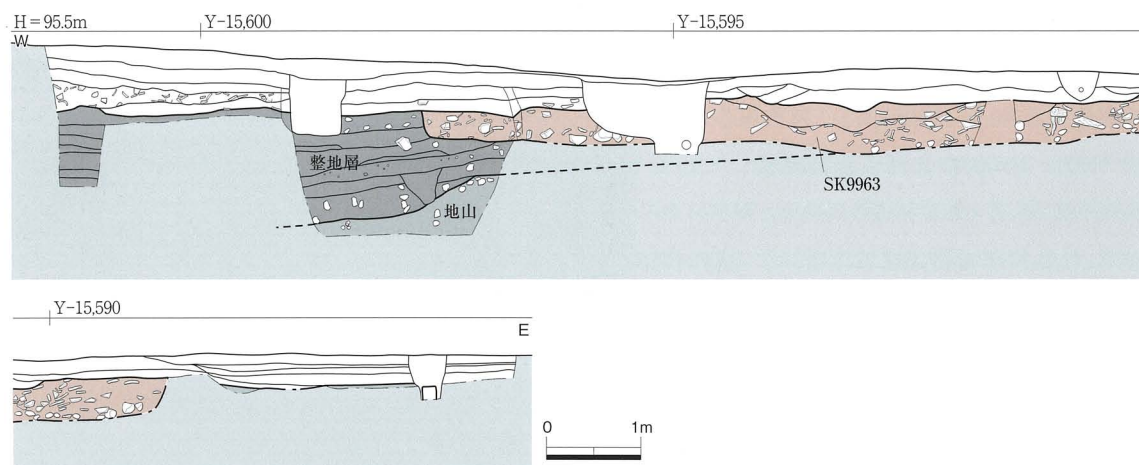
3 遺 構

(1) 調査前の地形と基本層序

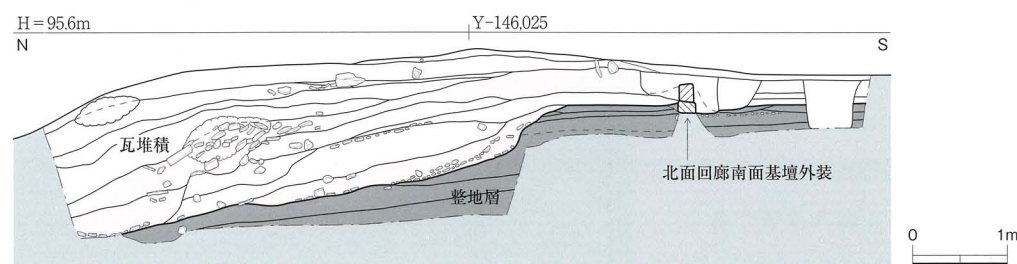
調査開始前の敷地の状況 調査開始前の調査地の地形はほぼ平坦である。北円堂の周囲には、近年に成長したとみられる多数の樹木があったが、調査にともない多くは撤去した。大岡実氏の研究によると、昭和初期には北円堂回廊の礎石とみられる石が残っていたとあるが、調査段階ではそれらしい石材は確認できず、近年に取り除かれたようである。敷地南面には興福寺境内から西の商店街へ抜ける道路があり、西に大きく傾斜している。西面、北面は崖状に落ち込み、西面は漆喰塗土塀風の耐火壁を、北面の一部は石積の擁壁を築く。これらは1976年度の防災工事時に整備されたものである。

基盤層と整地 北円堂院の基盤層は黄褐色から赤褐色の礫層で、これまで中金堂院や南大門の調査でも同様の基盤層が確認されている。この基盤層は、南面回廊付近では西に向かって緩やかに傾斜し、Y-15,597付近で傾斜を変え落ち込んでいく（第3図）。その地形は調査区南面の東西道路とほぼ連動しており、北円堂造営時に1.2m以上の盛土をおこなって整地をしていることが断面観察から判明した。また北面回廊周辺は、断割調査によって約2m程度掘り下げたが、基盤層を確認することはできなかった（第4図）。これは、後世の攪乱によるものと考えられ、実際に現代の遺物が混入する土坑状の瓦堆積があり、これが北円堂院回廊の北面を広い範囲で破壊していた。

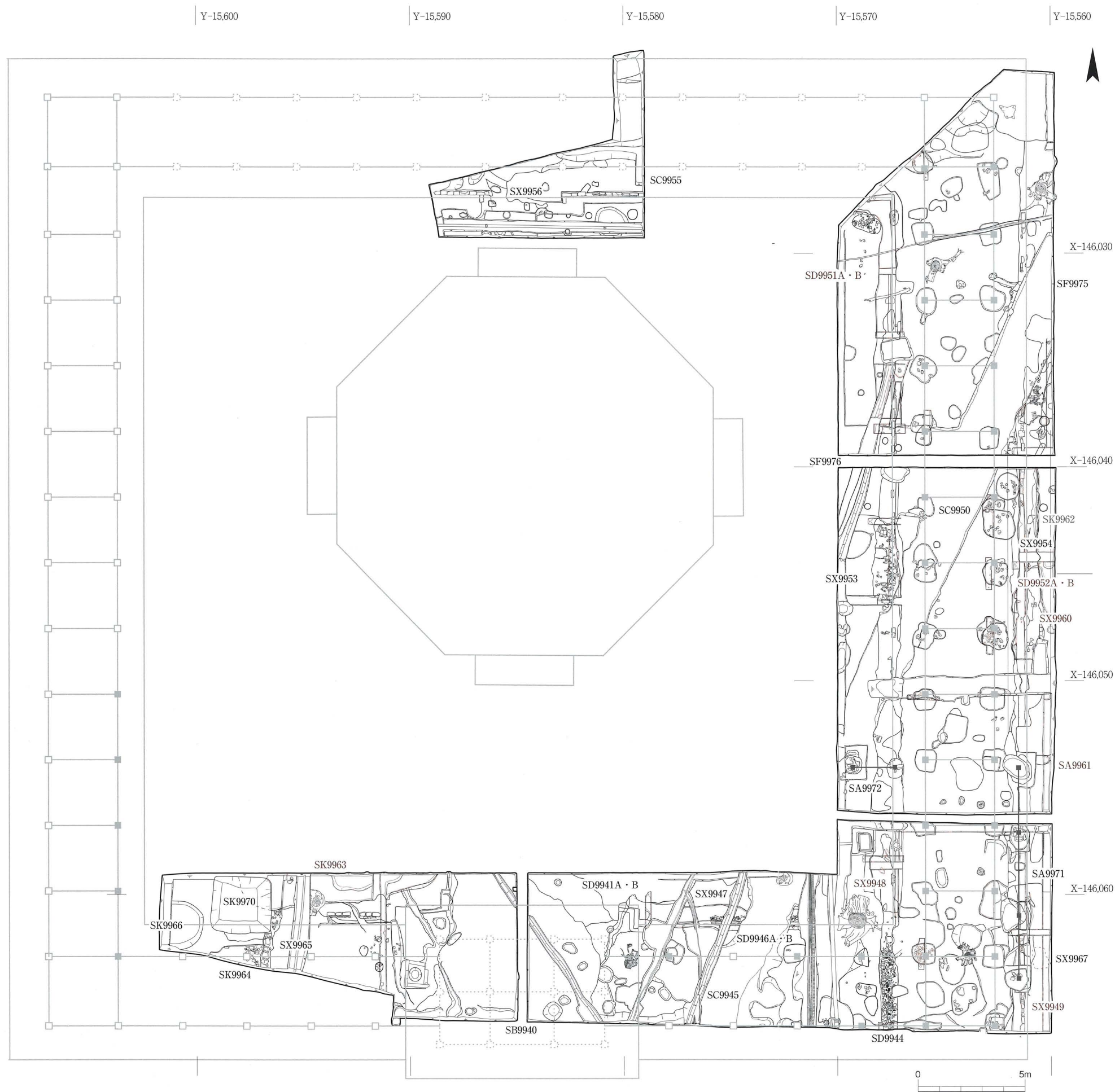
整地層は、南面回廊西半と北面回廊部分とで様相が異なる。南面回廊西半では、基盤層の上に10～20cmの厚さで粘質土を数層積み上げる。標高94.0m付近に埋没腐植土層があり、これがかつての地表面であった可能性もあるが定かではない。北面回廊付近では、黄褐色粘土や褐色シルトを20cm程の単位で積み上げ整地する。



第3図 南面回廊付近調査区北壁断面図 1:80



第4図 北面回廊付近調査区東壁断面図 1:80



第5図 遺構平面図 1 : 200

(2) 南 門

南門SB9940 南面回廊の中央、北円堂の正面に開く門。遺構の大半は削平により失われており、わずかに北東隅および北西隅で、基壇土の範囲と基壇外装の抜取溝を確認した。

基壇土は地山を削り出した上に黄褐色の粘質土を積むが、積土を確認したのは遺構の東部3分の1程度のみで、他は削平されていた。基壇北東部では、直角に曲がる地覆抜取溝を確認した。抜取溝は2時期分で、内側に深さ0.2mの溝SD9941A、外側に深さ0.2m、幅0.3mの溝SD9941Bがあり、基壇外装の改修があったことがわかる。地覆石などの石材は残存していない。また基壇上面で、礎石の痕跡などは確認できなかった。

この抜取溝の隅部を南面回廊の推定中軸線で折り返すと、基壇規模は東西10.9m(37尺)、南北8.1m(27尺)となる。

(3) 回 廊

北円堂院の回廊は単廊で、基壇は地山を削り出し、地山の低い北部や南西部では盛土を施した上で黄褐色粘質土の基壇土を載せて造成している。南門西半以西は削平のため遺構は確認できなかったが、それ以外の調査区内のほぼ全域で南面・東面・北面回廊の基壇土、外装抜取溝、礎石据付・抜取穴などを確認した。

南面回廊SC9945 南門の東側で、北面の基壇外装抜取溝と礎石抜取穴を確認した。

基壇外装抜取溝SD9946は、南門と同じく2時期分を確認した。古い方の溝SD9946Aがやや内側にあり、改修後の溝SD9946Bには地覆石とみられる凝灰岩が部分的に残存する。後述する東面回廊SC9950でも同様の地覆石を確認しており、取り上げたもののうち大きいものは長さ37.0cm、幅21.0cm、厚さ12.0cmを測り、重さは16.9kgであった。石材はいずれも地獄谷溶結凝灰岩である。なお、南門の西側にも、凝灰岩切石列が残存するが、基壇外装想定位置よりも北にずれ、基壇土の外側の土層に含まれ



第6図 調査区全景（南から）

ることから、回廊基壇外装の石材を後世に再利用して並べたものと判断した。

瓦溜SX9947は、基壇外装抜取溝SD9946Bを覆う溝状の遺構で、多量の瓦片が含まれる。幅は南北1.2m。後述する東面回廊でも同様の瓦溜を確認している。

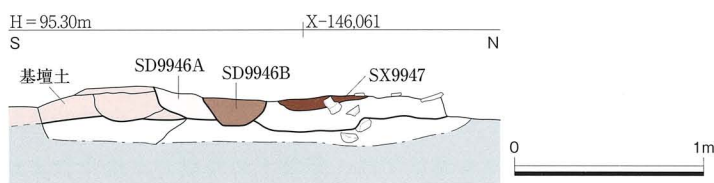
礎石据付痕跡は、東南隅の1間分を除くと、北側柱列で3基、南側柱列で1基確認した。柱間寸法は、桁行3.0m（10尺）、梁行3.3m（11尺）である。いずれも残存状態は非常に悪く、据付痕跡の底部がかろうじて確認できる程度であった。礎石や根石などは残存していなかった。

南辺の基壇縁が調査区外にあたるため正確な数値は不明だが、柱筋の中軸で折り返すと、基壇幅は6.6m（22尺）となる。

東面回廊SC9950 東面回廊に関わる遺構は、基壇土、基壇外装および基壇外装抜取溝、礎石据付・抜取穴を確認した。

基壇外装は、東西両側で部分的に凝灰岩の地覆石が残存しており、それ以外の部分では地覆石の抜取溝SD9951B（西側）・SD9952B（東側）を検出した。また、南門・南面回廊と同じく、先行する地覆石抜取溝SD9951A・SD9952Aを確認しており、検出した地覆石は造営当初のものではなく、改修後の遺構であることがわかる。SD9951A・SD9952AはSD9951B・SD9952Bよりも約1石分内側にあり、それぞれの東西幅は5.8m・6.2mとなる。西側の抜取溝SD9951Bは調査区の北端付近で直角に西に曲がり、ここが回廊の東北の入隅であることがわかる。

基壇の上面では、回廊側柱礎石据付・抜取穴を検出した。南端を含めて南北13間となるが、もっと



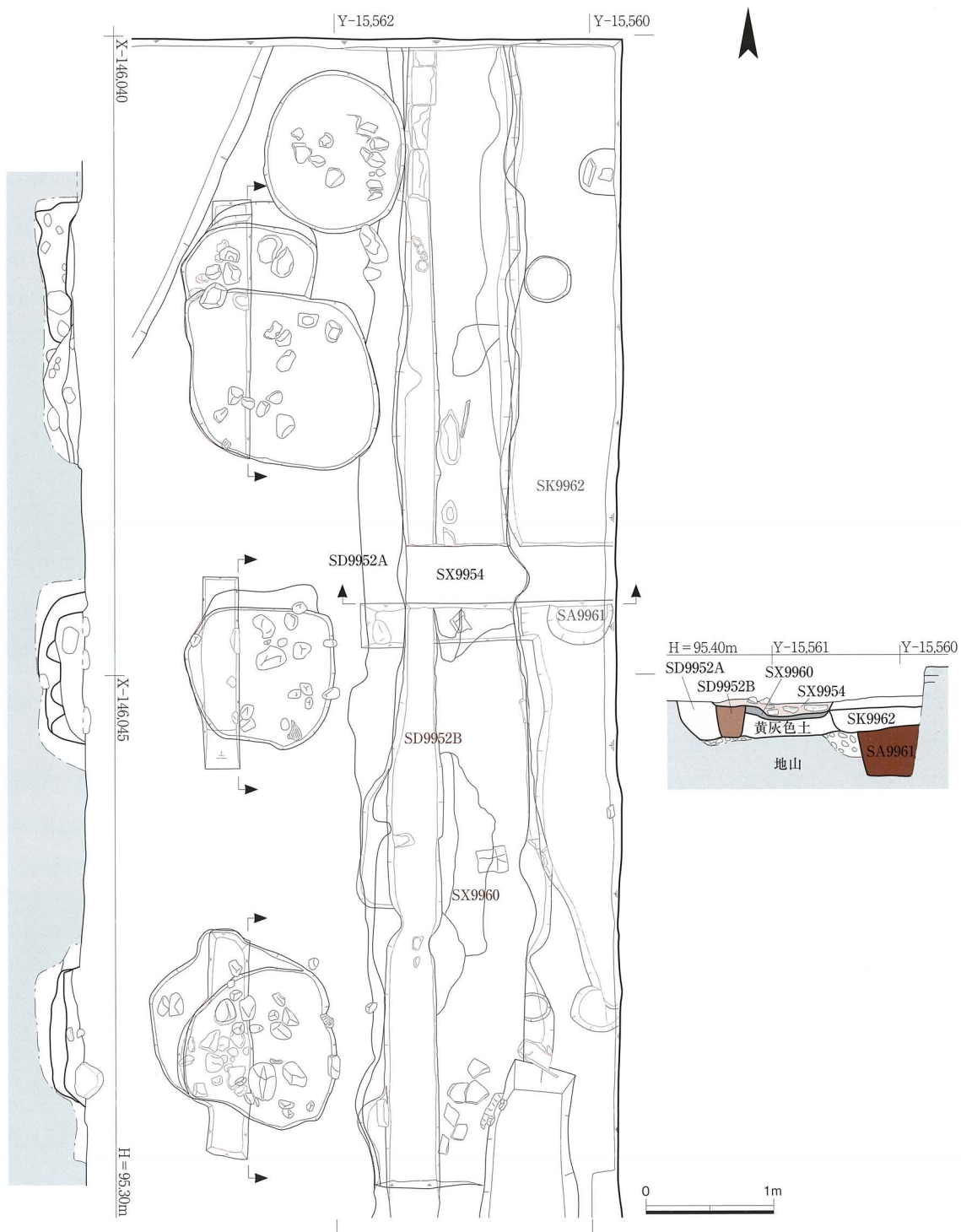
第7図 南面回廊基壇外装断面図 1:40



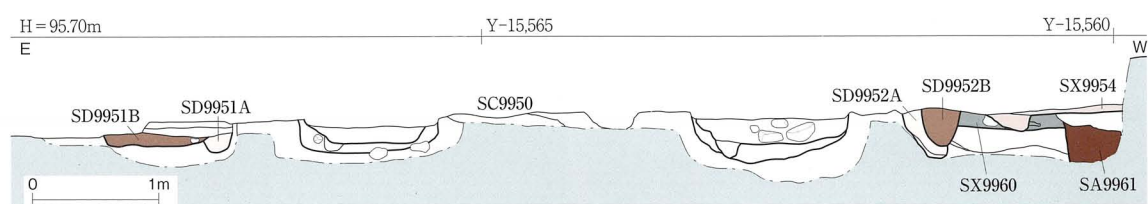
第8図 南門基壇地覆石抜取溝および瓦溜（西から）



第9図 南面回廊北側地覆石抜取溝（東から）



第10図 東面回廊東辺 遺構平面図・断面図 1 : 50



第11図 東面回廊基壇土断面図 1 : 60

も北の柱穴は後世の攪乱により破壊されており確認できなかった。柱間寸法は、梁行3.3m（11尺）、桁行は南端が3.3m（11尺）で、それ以外は2.9～3.3mと均一ではない。礎石据付穴は一辺1.1mの隅丸方形で、5～20cmの根石が残存するが、礎石そのものは失われている。埋土には遺物がほとんど含まれておらず、据付・抜取の年代は不明である。また、礎石据付の改修痕跡は認められなかった。

基壇外装抜取溝の上面には焼土面SX9960およびそれを覆う炭層があり、その上に鎌倉時代の軒瓦を含む溝状の瓦溜SX9953（西側）・SX9954（東側）が載る。SX9960は東面回廊の東側では顕著に認められるが、西側では確認できなかった。この焼土面SX9960は、残存する地覆石上面と同じレベルで地覆石の内側（＝回廊基壇側）にも広がっており、外装抜取溝SD9952BはSX9960を掘り込んでいた。すなわち、基壇外装の上部（羽目石以上）がすでに失われていた状態で火事などで周囲が焼け、その後地覆石を抜き取っていることがわかる。瓦溜SX9954はこの抜取溝SD9952Bを覆うように広がっている点が注目される。なお、回廊東側のSX9954からは奈良時代の軒平瓦（第24図16）と鎌倉時代の軒平瓦（第24図35）が集中して出土している。

北面回廊SC9955 北面回廊の南側基壇外装は防災調査で確認されており、今回の調査では同遺構を再発掘した上で基壇土や柱痕跡などの確認を目的としたが、柱穴および基壇北辺の遺構は削平のため確認できなかった。

基壇は、多量の盛土の上に黄褐色の粘質土と砂質土を交互に積んで造成するが、版築というほどの明瞭な層はなさない。

基壇外装は、凝灰岩の地覆石と羽目石が良好な状態で残存し、中央部に回廊内側への階段SX9956の地覆石が突出する。地覆石は幅15～20cm、成10～15cm、長さ20～40cmで、その上に幅12～15cm、成18cm、長さ28～43cmの羽目石を並べる（第14図）。葛石や束石は確認できなかった。階段SX9956の地覆石は東西1石ずつ残存し、心心間寸法は3.9m（13尺）である。

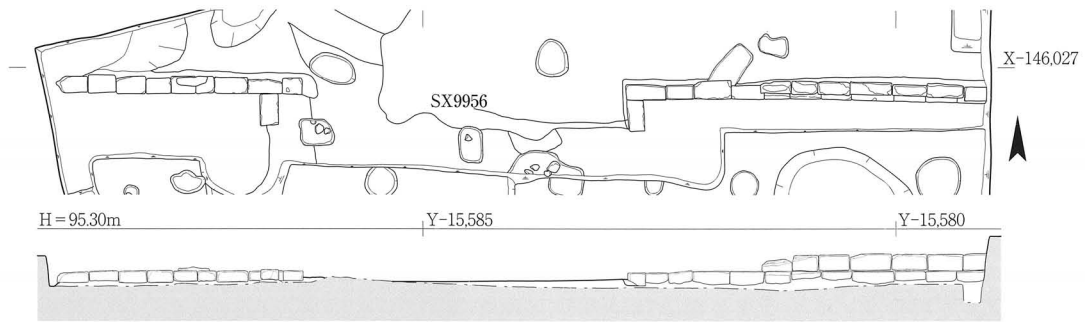
回廊の規模 以上の回廊の検出状況より、遺構全体の規模を確認する。防災調査で確認された遺構と



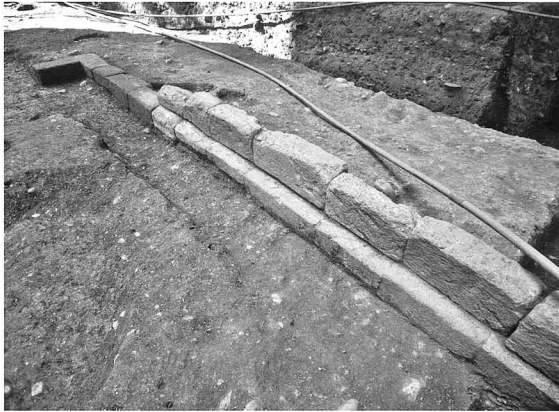
第12図 東面回廊東側瓦溜（北から）



第13図 東面回廊西側基壇外装（北西から）



第14図 北面回廊南側基壇外装地覆石・羽目石 平面図・立面図 1 : 80



第15図 北面回廊南側基壇外装 (南東から)



第16図 礫敷舗装面SX9949 (北東から)

合わせると、回廊の規模は南北43.5m (147尺)、東西44.3m (150尺)、梁行3.3m (11尺) となり、『興福寺流記』に記された回廊の規模と一致する。

暗渠SD9944 回廊東南隅部で検出した南北方向の瓦積溝。回廊内の排水のために設けられた暗渠である (第17～20図)。幅は0.8mで、底面に河原石を並べ、側面は平瓦を丁寧に平積みする。断割調査の結果、現在の瓦積の外側に古い抜取溝があり、造営当初の暗渠は内法幅が現在よりも広く、その後幅を狭めて瓦積に改修したことがあきらかとなった。当初はおそらく側面も石積だったものと考えられる。回廊内側の雨落溝からの水を受けていたとみられるが、雨落溝自体は検出していない。

(4) その他の遺構

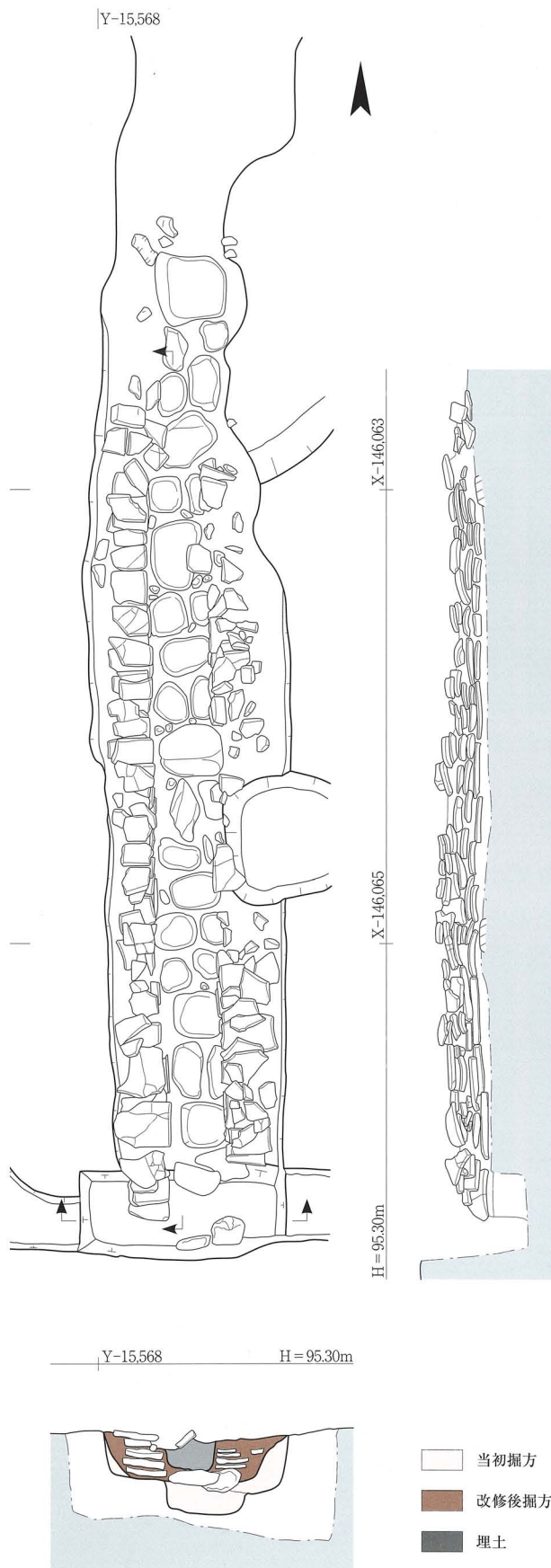
礫敷舗装面SX9948 東面回廊SC9950の内(西)側で検出した礫敷面。径3cm前後の礫を敷いた舗装面で、回廊内庭部の舗装とみられる。

礫敷舗装面SX9949 東面回廊SC9950の外(東)側で検出した礫敷面。径1cm程度の小礫を敷き詰めて舗装している。回廊の外側のある一定範囲の舗装を示す。この礫敷は地覆石東際から広がっており、基壇外装の外側に雨落溝が設けられていなかったことがわかる。

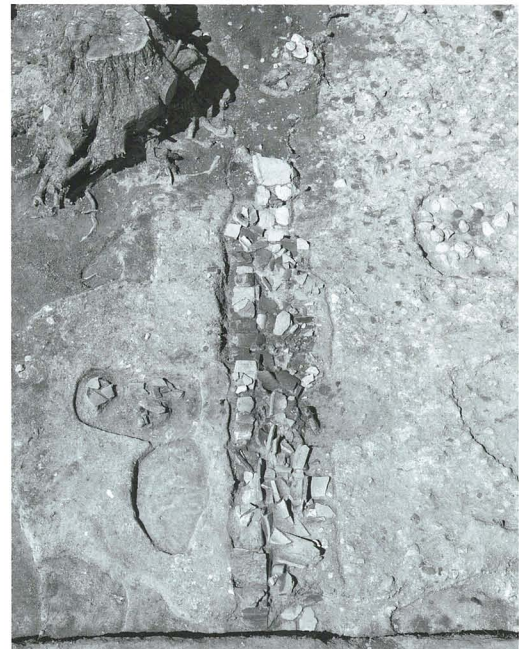
土坑SK9962 東面回廊中央部の東側で検出した落ち込み。焼土面SX9960を掘り込み、瓦溜SX9954に覆われる。調査区内では西辺を検出したのみで、大半は調査区の東側に広がるとみられる。

土坑SK9963 南門SB9940の北西で検出した土坑。埋土に多量の瓦を含む。瓦の年代が平安時代を下限とすることから、治承焼討後の整地の際に不要となった瓦を投棄したと考えられる。

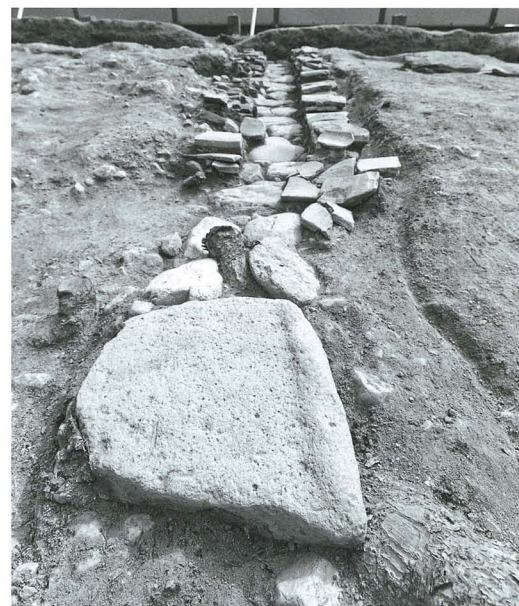
南北柱穴列SA9961 SK9962の下層で検出した南北柱穴列。直径40cmの円形の柱穴7基を確認した。柱間寸法は3.0～3.4m。瓦溜SX9954を掘り込む。年代は不明であるが、配置より回廊解体にともなう足場穴の可能性もある。



第17図 暗渠SD9944 平面図・断面図・立面図 1 : 30



第18図 暗渠SD9944 (南から)



第19図 暗渠SD9944完掘状況 (北から)



第20図 暗渠SD9944完掘状況 (北東から)

土器溜SX9967 東面回廊東側瓦溜SX9954を覆う暗褐色土層上で検出した。室町時代の土器片を多量に含む。

土坑SK9966 調査区西端で検出した直径2.3mの円形の土坑。埋土から近世の瓦・土器・陶磁器などが出土した。

土坑SK9964 SK9966の東で検出した土坑。南半は調査区の外に続く。直径10～30cmの礫を含む。東端は石列SX9965に掘り込まれている。

石列SX9965 直径40cm程度の礫が南北に並ぶ石列。SK9964の東肩を掘り込み、北端は土坑SK9970に掘り込まれている。性格は不明。

近世道路SF9975・9976 SF9975は北円堂の東側を北東から南西に通る道、SF9976はSF9975から北円堂東面階段へ至る東西方向の道（第21図）。幅は約2.4mで、回廊基壇土を掘り込んで設けられている。路面は小礫を敷き詰め上面を叩き舗装する。『大和名所図会』に描かれる道路と一致し、江戸時代後半にはすでに設けられていたとみられる。

南北柱穴列SA9971・東西堀SA9972 調査区東南隅部で検出した柱穴列。いずれも直径1.0～1.4m程度の掘方で、根石とみられる玉石が詰まっていた。埋土は明黄色砂質土。SA9971は南北に通る柱穴列で、柱穴4基を確認した。柱間寸法は北から3.0m・3.9m・3.0mである。SA9972は東西方向に並ぶ柱穴列で、柱穴2基を確認した。柱間寸法は2.0mである。SA9972の延長上にSA9971北端の柱穴が位置するが、両者が同一の遺構かどうかは不明。SA9972西柱は近世道路SF9975の埋立土を掘り込んでおり、近代以降のものと判断される。

土坑SK9970 調査区西端で検出した大土坑（第22図）。平面は2.4m×2.7mの矩形で、深さは2.6m。壁面を厚さ3～5cm程度の粘土で塗り固めていた。埋土には現代のごみが大量に投棄されており、最終的にはごみ穴として埋め立てられている。興福寺長老の話によると、第二次世界大戦中、北円堂周辺に防空壕があったといい、この土坑がその遺構である可能性がある。



第21図 近世道路SF9975・9976（北東から）



第22図 土坑SK9970（南西から）